令和４年度第２回

さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会

会　　議　　録

日　時：２０２２年7月１５日（金）午後４時開会
場　所：札幌市スポーツ局　７階　会議室

１．開　　会

○事務局（伊藤広域連携担当課長）　定刻となりましたので、ただいまから令和４年度第２回さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会を開催いたします。

皆様には、大変お忙しい中、ご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

札幌市まちづくり政策局政策企画部広域連携担当課長の伊藤と申します。

本日、急遽、局長の小角が公務の都合により欠席、部長の浅村も公務のため後ほど参りますので、会長選任までの間、私が進行を務めさせていただきます。

まずは、皆様のお手元にあります資料の確認をさせていただきます。

次第のほか、資料１、さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会構成員名簿、座席表、資料２のさっぽろ連携中枢都市圏ビジョン懇談会設置要綱、資料３のさっぽろ連携中枢都市圏２０２１年度連携事業実施状況等概要、資料４のさっぽろ連携中枢都市圏２０２１年度連携事業実施状況等一覧、資料５のさっぽろ連携中枢都市圏ビジョン概要①（２０２２年４月変更版）、資料６のさっぽろ連携中枢都市圏関連スケジュール（２０２２年度）、また、参考資料として、さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン２０２２年４月変更版の白冊子をお配りしております。

以上の資料につきまして、不備がございましたら事務局までお申しつけください。

本懇談会の目的ですが、資料２としてお配りしております要綱第１条に規定しておりますとおり、連携中枢都市圏ビジョンに関して必要な協議や懇談を行うという点にございます。本懇談会でいただいたご意見等を通じ、より良いビジョンにしていきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願いいたします。

次に、本懇談会の構成員の皆様の委嘱についてですが、既に委嘱状をお手元に配付させていただいております。

大変恐縮ではございますが、この配付をもちまして委嘱に代えさせていただきたく思いますので、ご了承くださいますようお願いいたします。

なお、本日の懇談会につきましては、オンライン参加の２名を含む合計１２名のご出席をいただいておりますので、先ほどの要綱第６条第３項に基づき、定足数を満たし、会議が成立していることを申し添えます。

続きまして、構成員の皆様をご紹介させていただきます。

初めに、今回、ＮＰＯ活動と大規模集客施設の２分野から新たにご就任をいただきました構成員の方々からご紹介させていただきます。

ＮＰＯ法人ｅｚｏｒｏｃｋ代表理事の草野竹史様です。

また、本日はご欠席ですが、イオン北海道株式会社執行役員の玉生澄絵様にご就任いただいております。

次に、任期満了に伴い、継続していただきました構成員の方々を事務局の左側から時計回りでご紹介させていただきます。

北海道農業協同組合中央会参事の伊藤謙二様です。

株式会社北海道銀行地域創生部次長の稲上巧様です。

公益社団法人北海道観光振興機構常務理事兼事務局長の木原昌良様です。

一般財団法人さっぽろ産業振興財団専務理事の木村義広様です。

環境省北海道地方環境事務所統括環境保全企画官の小高大輔様です。

一般社団法人札幌市医師会理事の白崎修一様です。

札幌市立大学名誉教授の中原宏様です。

北海道大学大学院経済学研究院教授の平本健太様です。

一般社団法人北海道商工会議所連合会政策企画部長の福井邦幸様です。

また、オンラインによりご出席いただいております社会福祉法人北海道社会福祉協議会事務局長の庄田香織様です。

小樽商科大学名誉教授の李濟民様です。

また、本日はご欠席ですが、株式会社北洋銀行地域産業支援部長の越田雄三様、北海道商工会連合会組織経営支援部広域支援課長の佐々木健雄様にご就任いただいております。

このほか、札幌地区バス協会様から引き続き構成員にご就任いただく予定です。

事務局は、私、伊藤と、後ほど参ります部長の浅村で、本日の会議の進行を補佐させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

２．会長・副会長の選任

○事務局（伊藤広域連携担当課長）　次に、次第の２の本懇談会の会長と副会長の選任を行いたいと思います。

要綱第５条第１項の規定において、構成員の皆様の互選により会長及び副会長を置くこととしております。

どなたかご推薦のある方がいらっしゃいましたら、挙手の上、ご発言をお願いいたします。

○中原構成員　会長には平本様が、それから、副会長には李様がご適任と考えますので、推薦申し上げたいと思います。

○事務局（伊藤広域連携担当課長）　ありがとうございます。

ただいま、会長には平本様、副会長には李様というご推薦がございましたが、皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（伊藤広域連携担当課長）　ありがとうございます。

ご異議がないようでございますので、平本様に会長、李様に副会長をお引き受けいただきたいと思います。

それでは、平本様、会長席にお移りください。

〔会長は所定の席に着く〕

○事務局（伊藤広域連携担当課長）　ここからの議事進行については、平本会長にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。
○平本会長　皆様、改めまして、こんにちは。ただいま会長に選任されました北海道大学の平本です。
　このビジョン懇談会というのは、お名前からも分かるとおり、ざっくばらんに意見を出していただき、いい連携中枢都市圏とすることを目指すものですので、本日もご審議のほどをよろしくお願いいたします。
　それでは、着席させていただきます。

　　３．資料説明
○平本会長　それでは、早速ですが、次第に沿って議事を進行させていただきます。
　３の資料説明についてです。
　事務局から昨年度までの取組と今年度の計画等についてご説明をいただき、その後に委員の皆様方よりご意見を頂戴したいと思います。
　それでは、まずご説明をお願いいたします。
○事務局（伊藤広域連携担当課長）　それでは、お配りした資料につきまして、引き続き私からご説明いたします。
　まず、Ａ４判の資料３のさっぽろ連携中枢都市圏２０２１年度連携事業実施状況等概要をご覧ください。
　上段に、各連携事業における評価指標として掲載しておりますとおり、昨年度の総括といたしましては、さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン掲載事業の評価可能な６１指標について、７割以上となる４２指標が二重丸の達成済みとなっております。
　新型コロナウイルス感染症の影響を受けたため、バツの達成不可となった１４指標を除きますと約９割が達成済みとなることから良好な水準であると考えております。
　なお、ビジョン掲載外の新たな取組といたしましては、タスクフォースを設置いたしまして、圏域内の森林整備や地域材の利用、森林環境譲与税の活用等について検討を行いました。
　検討の結果､令和４年度から森林整備等に関する取組の推進として事業化しております。
　また、広域的なヒグマ対策に関する協議の場を設け、課題等の解決に向けた取組に関する意見交換を行いました。
　こちらも令和４年度から鳥獣対策等に関する取組の推進として事業化しております。
　続きまして、指標を達成した主な事業についてご紹介いたします。
　ただいまご覧いただいております資料３の中段のほか、Ａ３判の資料４も併せてご覧いただければと思います。
　資料４ですが、字が小さくて大変申し訳ございません。右から２列目が連携事業名、一番右側が３月末時点での連携事業実施状況等となっております。

まず、経済の分野で申し上げますと、Ａ３判の資料の１ページ、連携事業名の２の連携した企業誘致の推進では、昨年５月に札幌圏としてパシフィコ横浜の産業展示会に共同出展し、企業誘致の推進を図っております。

また、札幌圏設備投資促進補助金の運用として、恵庭市と千歳市に立地する案件の申請があり、今後、補助適用予定となっております。

その下の３の創業の促進ですが、各事業への参加者が３，９４１名となり、スタートアップ企業との協働により行政･地域課題の解決を目指すプロジェクトであるＬｏｃａｌ　Ｉｎｎｏｖａｔｉｏｎ　Ｃｈａｌｌｅｎｇｅ　ＨＯＫＫＡＩＤＯにおいては、札幌圏を対象とした部活の地域移行を実現するマッチングプラットフォームの試行導入や南幌町を対象とする次世代型の教育プログラムの実施などが採択されました。

また、ポータルサイトを活用した事業継承のマッチング支援を行い、小樽市、岩見沢市、江別市、北広島市の４組が具体的な継承手続に向けた交渉を実施しております。

さらに、その下の４の新製品・新技術開発のための支援では、小規模企業向け製品開発・販路拡大支援事業において江別市の企業が、プロダクトデザイナー派遣事業において当別町の企業がそれぞれ支援を受けております。

下から２段目の１０の共同プロモーションや観光資源の活用等の推進では、圏域内全市町村で構成するさっぽろ連携中枢都市圏観光協議会において、台湾、香港への戦略的な共同プロモーションを実施しております。

２ページの都市機能の分野の取組では、一番上の１２の三次救急医療等の提供として、市立札幌病院の運営を通じて三次救急医療等を提供しており、一番下の１７の公共施設の相互利用や配置に関する検討では、令和４年３月に札幌市火葬場・墓地に関する運営計画を策定し、公共施設の相互利用やバックアップ体制の構築等に関する会議を開催いたしました。

続きまして、３ページの生活関連分野の取組といたしましては、上から２段目の１９の保育サービスの向上に向けた取組の推進として、保育士確保のための連携した取組に関する会議を開催し、また、圏域内を対象とした保育士合同就職説明会には千歳市と当別町からも事業者の参加がありました。

同じく３ページ中段の２５の雪堆積場の共同活用では、例年どおり、北広島市と石狩市において雪堆積場を開設したことに加え、２月の大雪に対応するため、石狩市においてさらに２か所の緊急用雪堆積場も開設しております。

４ページの下から５段目の４１の「札幌ＵＩターン就職センター」の広域的活用では、交通費補助を利用し、１１名が圏域内企業に就職を決定しております。

同じく４ページの一番下の４５のさっぽろ圏人材育成・確保基金の造成では、個人から３，１６３万４，０００円、企業から４０万２，０００円の計３，２０３万６，０００円の寄附を受け、基金に積立てをいたしました。

今後、この基金を活用し、奨学金返還支援や周産期救急医療従事者研修などを実施する

予定です。

他方、指標の達成ができなかった事業として、１ページの一番下の１１のＭＩＣＥ誘致の推進や３ページ中段の２６のにぎわいの創出、５ページ下から３段目の４９の職員研修等の合同実施などにつきましては、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、事業の性質上、オンライン開催も断念したものです。しかし、今年度は各種イベントも開催されるようになってきていることから、これらの事業についても目標値を達成できるのではないかと期待しております。

なお、Ａ４判の資料３の下段にございます三つの役割における重要業績評価指標（ＫＰＩ）につきまして、観光入り込み客数、札幌駅の乗車人員数（１日平均）における数値の悪化は、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けたものと思われます。

また、２０歳から２９歳人口における道外への社会増減数も残念ながら数値が悪化しておりますが、今後、目標値の達成に向け、圏域内市町村と一緒に協議・検討を続けてまいります。

資料３及び資料４についての説明は以上となります。

資料５につきましては、メール会議とさせていただいた第１回ビジョン懇談会でお示しした内容と変わっておりませんので、説明は省略させていただきます。

続きまして、Ａ４判の資料６のさっぽろ連携中枢都市圏関連スケジュール（２０２２年度）についてご説明いたします。

ビジョンにつきましては、毎年度、所要の変更を行う旨、総務省の要綱に定められておりますが、４月に書面にて開催させていただいたビジョン懇談会において２０２２年度の変更について承認をいただいております。本日の第２回ビジョン懇談会では、２０２１年度の取組結果について報告をさせていただいているところです。

今後のスケジュールといたしましては、８月２６日にさっぽろ連携中枢都市圏関係首長会議を開催し、２０２１年度の取組結果の報告を行うとともに、連携中枢都市圏を形成してから３年が経過しましたことから、取組成果についてご説明し、来年度に控えております第２期さっぽろ連携中枢都市圏ビジョン策定に向けてご意見を伺う予定です。

また、定期的に開催する実務者会議におきましては、連携市町村の課題共有、情報交換のほか、第２期ビジョンの策定に向け、どのような内容とすべきか、忌憚のない意見を交わしていきたいと思っております。

札幌市庁内においても、中枢都市としての役割を積極的に果たすべく、副市長を筆頭とする推進本部会議を開催し、札幌圏の発展に向けた取組の推進を図ってまいりたいと考えております。

資料の説明は以上となります。

４．意見交換等

○平本会長　それでは、ただいま全ての資料についてご説明をいただきましたので、この

内容にご質問やご意見、お気づきの点などがあればご自由にご発言いただきたいと思います。どなたからでも結構ですので、挙手の上、ご発言いただければと思います。

オンラインのお２人の委員もご発言があるときにはマイクをオンにしてご発言をお願いいたします。

いかがでございましょうか。

それでは、木村委員、お願いいたします。

○木村構成員　私どもが担っておりますオープンデータの活用の関係についてです。

先ほど資料を見ておりましたら、コロナの関係もありまして、バツとなっておりましたけれども、今年度の取組について、よろしければお話をさせていただければと思います。

資料４の４ページの３７です。

札幌市のＩＣＴ活用プラットフォームについては産業振興財団で運用させていただいておりますけれども、コロナの影響がかなりありました。当初、観光などのデータを使いながら、いろいろな活用を進めていければと動いておりましたけれども、データ収集が十分にできなかったということもあって、多分、それでこういう評価になっているのかなと見ております。

私どもはＩＣＴ活用プラットフォームでオープンデータを中心に提供させていただいておりますけれども、今年度、新たに、民間のデータも含め、データ取引をできるような取引所を立ち上げたいと考えております。そこでは、オープンデータだけではなく、有償データも含め、その取引所の中で取引され、そういったデータを使って、より価値のある効果的なサービスにつなげていけないのかに取り組もうとしております。

もう一点、オープンデータの関係を進めてきて感じることは、やはり、データを有効活用していく上で、社会全体といいますか、我々は産業ですけれども、デジタル化がベースになるということです。

昨年まではＩＴ利活用ということでやっておりましたが、今年度は、新たに、中小企業のＤＸ推進事業を立ち上げ、大手企業のＣＤＯの方にいらっしゃっていただいて、先進事例のセミナーをいたしました。また、ＤＸ推進のための補助金なども今年度から新たに運用させていただいており、企業のデジタル化を推進することについても力を入れ、データ利活用につなげていきたいなと思っております。

○平本会長　コロナでバツがついているものは、致し方ない外部環境によるものだと思います。一方、産業振興財団としては、ＤＸの推進に向け、様々な事業を今年度から立ち上げたということでした。

実は、私は補助金の事業の審査員をやらせていただいておりまして、よく存じ上げております。

ほかにいかがでございましょうか。

○草野構成員　先ほど、自己紹介をせずに失礼しました。ＮＰＯ法人ｅｚｏｒｏｃｋの代表をしています草野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、私が何者なのかです。少し変わった法人名をしておりますが、なぜ私がここにいるのかをご説明してから議論に参加させていただけたらと思います。

私は、分かりやすく言いますと、主に２０代の数百人規模の若い者が中心となる会員組織の運営をしております。皆さんでつながりあるとすればポロクルです。これは札幌市内の自転車のシェアリング事業ですが、この現場運営をやっているのが当団体でして、若者と地域課題ということで道内各地において事業展開をしております。

団体名は、石狩でやっているＲＩＳＩＮＧ　ＳＵＮ　ＲＯＣＫ　ＦＥＳＴＩＶＡＬという音楽のお祭りがきっかけです。２０年前、そこでのごみ問題に若者が突っ込んでいったところから、社会課題に取り組んでいく若者が人生を変化させていくということに取り組んでいった結果、いろいろな社会課題や地域づくり、環境保全、今で言うＳＤＧｓの分野にかけるユースという取組を２０年ほどやってきました。そういったこともあって、今回、参加させていただいたということです。

加えて、東日本大震災の災害支援以降、地域に若者が参加するという機会をかなりつくるようになってきておりまして、北海道各地に若者を送るような事業も展開してきております。札幌圏で言いますと、私たちの事務所は中島公園の近くにあるのですけれども、第２拠点が札幌圏の中では一番奥にある、石狩市の浜益区にある一軒家です。浜益区は、人口が１，２００人、高齢化率が６０％の地域ですが、そこに若者が出入りしていった結果、地域と若者にどのような変化が起きるのかを検証しながら地域づくりを進めるなど、比較的幅広く取り組んでおります。

今回の全体像が非常に多岐にわたっており、把握できているものとできていないものがあるのですけれども、まず、大学生の現状についてです。コロナにより、大学３年生でも友達が０人の子がまだいるという状況です。ただ、私たちの団体にも全国から非常に問合せが増えておりまして、地域なり現場に足を運びたいユース世代が非常に多い状態でもあります。

私たちはコーディネート組織ではあるのですけれども、現場とマッチングさせ、回していくには限界があります。頑張ってはいるのですけれども、今、ユース世代は地域づくりやＳＤＧｓの関連の事業に足を運んで自分も経験を積みたい、それで自分のスキルアップもしていきたいと思っております。かつ、第２のふるさとのようなものを見つけ、キャリアと北海道の地域づくりを重ねていきたいとも思っておりまして、そうしたことをお伝えさせていただけたらと思います。

○平本会長　今回から新たに加わっていただきました草野委員のここまでの取組をごく簡単にご説明していただきましたけれども、とても重要な話を含んでおりますし、連携中枢都市圏の様々な課題と若者と地域の問題というのは将来のことを考えたときにとても重要なポイントになるかと思いますので、これからどうかよろしくお願いいたします。

ほかにいかがでございましょうか。

○白崎構成員　資料４の２ページの１２に三次救急医療等の提供とありますが、これに関

連してお話しします。

札幌圏域に挙げられている市町村との間で、一次救急、二次救急についても、例えば、救急車の手配や管理について、札幌市保健所、札幌市消防局、札幌市医師会とで一元管理をしていこうという方向性で救急医療体制を組んでいるところですので、皆様にお知らせをしておきます。

来年春までに概略ができることになっておりますので、よろしくお願いいたします。

○平本会長　命に市町の境はないわけですので、そういった取組が行われるということはとても重要ですし、そのときに連携中枢都市圏がうまく機能しているということで、非常にいい事例のご紹介かと思います。

今回、二重丸やバツという達成度の評価があるのですけれども、私は札幌市の行政評価委員もやっておりまして、最近、ＫＰＩや指標などが本当にちゃんとその事業の成果を測れているのか、昨年度から今年度にかけて議論されております。

今回の資料について、ここがおかしい、これはこうするべきだと特に申し上げることはないのですけれども、我々が指標を見るときには本当にこれでいいのかというような視点で見る必要があるのではないかと考えております。

また、二重丸やバツなどで評価すると、二重丸はうまくいった、バツはうまくいかなかったと思えてしまうのですけれども、短絡的というと少し怒られるかもしれませんが、こういう仕分けがいいかどうかについて、これは札幌市全体あるいは行政全体の問題なのですけれども、そういった点もこういう資料を見るときには気をつけなければいけないと最近は思うようになってきたということで、情報提供をさせていただきました。

伊藤課長、どうぞ。

○事務局（伊藤広域連携担当課長）　今の平本会長のご意見に対し、事務局からも補足させていただきたいと思います。

連携中枢都市圏ビジョンに対する総務省からの指針の中でも、アウトプットではなく、アウトカムで評価しなさいと言われておりまして、その結果、どのような成果につながったのか、今後、来年度以降に第２期ビジョンの策定に当たるときには、そういった視点を大事にして評価指標をつくっていきたいと思っております。その一方、アウトカム指標というのは相手があるものとなりますので、それがどうつながったのかを評価するのは本当に難しいなところであり、皆様のご意見等も参考にしながら次期ビジョンをつくっていきたいと思っております。

○平本会長　おっしゃるとおりで、アウトプットとアウトカムでは大分違いますよね。これまで、行政ではアウトカム的なものを指標にしてきたことがあると言われています。例えば、ごみの削減の事業に関して、ごみ削減のセミナーに参加した人数が何人から何人に増えた、だからうまくいったというような見方をしていたわけです。しかし、アウトカムとなりますと、最終的にごみが何トン減ったかというようなことになるわけです。本当はセミナーに参加した市民の数を指標とするのはおかしいのだけれども、ほかにやりようが

ないからそうやってきたというところもあるわけです。

それに、これは行政だけではなかなかできないものです。でも、こういう懇談会の場において、それぞれのご専門のご見地から、こんな指標がいいのではないかというご意見をぜひ出していただきますと、連携中枢都市圏のこともそうですし、その他のこともそうなのですけれども、よりよくなっていくと思うので、お気づきの点があればどんなことでもご発言をいただければと思います。

ほかにどうでしょうか。

○福井構成員　ＫＰＩのお話はもっともだと思います。

我々も、昨日、観光と航空分野の勉強会をやって、スイスにいらっしゃる山田桂一郎さんをお招きしてお話を伺ったのですけれども、やはり、人数ではないのです。お金をいかに落としてもらうか、使ってもらうかに最大のポイントがあるので、人数を追う、回数を追うというのは違うかなと思っております。

もう一つ、平本会長からあった丸、バツの話についてです。

丸は、達成したからもういいやではなく、もっと先に行けるはずのものもあると思うのです。つまり、ここで達成したから終わりということではないですし、バツだから駄目ということでもないと思います。指標の考え方はこれから検討の余地がまだあると思いますけれども、できたか、できなかったか、０か１かではなく、もっと先に進めるようなＫＰＩの設定ができるといいかなと思っています。

また、いただいた資料から２点ほどお話をさせていただきます。

この冬、皆さんも大変な思いをしたと思うのですけれども、堆雪場が本当に足りず、道路の除雪も間に合わなくて大変なことになりました。しかも、堆雪場を追加で確保していただいたのですが、結局、ダンプの輸送距離が延びてしまい、回転数が落ちたのです。その結果、札幌市内の堆雪場が埋まってしまい、近隣に運んでいるという状況でした。これはなかなか予測できるようなものではないのですけれども、もう少しシミュレーションできないかなと思っていました。

今、交通分野の道路の除雪についてシミュレーションを始めています。また、ＪＲでも今回大変な思いをしたので、ＪＲ北海道でも、特に札幌と新千歳空港間の大雪の場合のシミュレーションが始められているので、そこと連携してもう少しできないかなという感じがしています。札幌では雪というのは切っても切り離せない問題ですので、もう少しうまくできないかなということです。

もう一点、資料４の４５の基金の造成についてです。

今、多くの自治体で取り入れているのが企業版のふるさと納税で、そういう取組をしているところでは納税額が増えており、小さいまちでも一定額の金額を全国から集められているというところもあります。人材育成だけではないと思うのですけれども、企業版ふるさと納税の活用について、中枢都市圏の皆さんでもぜひご検討をいただければと思っております。もう少し資金があればできるものもあると思いますので、検討の余地があるかな

と感じています。
○平本会長　ＫＰＩのこと、それから大雪の問題、企業版ふるさと納税のことで連携中枢都市圏という枠組みには使える余地がまだあるのではないかということでした。
　最後におっしゃった企業版ふるさと納税というのは、連携中枢都市圏を対象にふるさと納税をしてもらうということをおっしゃったのですか。
○福井構成員　基本的には自治体単位です。
○平本会長　そうすると、札幌市にはあまり入らないけれども、南幌町には入るということでも別に構わないということですか。
○福井構成員　それは自治体がどううまくやっていくかにかかってくると思いますが、情報共有でお互いを高められるかなと思います。
○平本会長　情報共有をしながら、連携中枢都市圏を構成している自治体それぞれにふるさと納税が入るように意識を高めたらいいということですね。
　人数ではなくてお金なのだというのはとても重要ですね。先ほどの観光の入り込み客数なども実人数を問題にしていたわけですけれども、コロナ禍前はそうだったのです。観光庁も人数を目標に設定していたのですが、その結果、オーバーツーリズムが大問題になったわけです。
　爆買いも一部の事業者にとってはよかったのですが、あまり健全に見えないというようなところがありますよね。それから、観光庁がよく言う大事なことは、訪れる人もいいし、住んでいる住民の人たちもいいということで、両方がハッピーになって初めて観光は回るわけです。しかし、近年のニセコの開発などを見ると、地元の人たちが置き去りにされ、しかも、スキー場周辺の物価がものすごく上がったせいで、若い人たちや子どもたちがスキー場に行けなくなってしまっているという状況が起こっているわけです。
　それは、数を追うような、売上高を追うような観光政策を展開してきたことの失敗なのです。でも、コロナという出来事があったおかげで我々は少し立ち止まって考えることができるようになったかと思います。つまり、人数は減らしても、１人当たりに落としてもらえるお金の額が多ければトータルではプラスになりますし、収益性という意味ではもっとよくなりますよね。ですから、ＫＰＩも含め、我々が今後の北海道やさっぽろ連携中枢都市圏を考える上で少し意識を変えていかなければいけないということです。
　というのも、今日は２年ぶりの対面での開催です。この間にコロナという大きな外部環境の変化があり、考えることも多かったので、口数も多くなっておりますけれども、そんなようなことを考えていたということです。
　ほかにいかがでございましょうか。
○白崎構成員　５の先端技術の活用に関する支援についてです。
　かつて、札幌では、シリコンバレーといいますか、札幌駅の北口のほうだったと思いますけれども、そういうものをつくろうとして、先端技術をそこに導入して、企業を誘致してという話を聞いたことがあるのですね。それに関連するような内容かと思うのですけれ

ども、小中学生を対象としたイベントとはどのようなものなのかを教えていただければと思います。

また、高校生や大学生の参加者が二重丸になっていますけれども、すごく少ないような感じがしました。どのようなセミナーを行われたのか、教えていただけますか。

○事務局（伊藤広域連携担当課長）　詳細については、今、詳しい資料を持ち合わせてございませんので、原局に確認し、追って皆様に情報を共有させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○白崎構成員　札幌圏から若者が流出するというのは、つまり、大学はたくさんあるわけですけれども、札幌ではなく、北海道ではなく、関東や本州のほうに働きに出てしまうという現実があるからこそ、こういう数字が出てくると思うのですよね。

企業誘致ももちろん大事でしょうけれども、昔の札幌にシリコンバレーをという考え方を残しておく、もしくは、もっと発展させていただきたいと思っていたもので質問させていただきました。

よろしくお願いいたします。

○平本会長　木村委員、お願いします。

○木村構成員　私も全部を分かっているわけではないのですが、一部、産業振興財団が行っている事業もありましたので、少しお話をさせていただければと思います。

上のＩＴ利活用ビジネスの拡大の補助については、先ほど申し上げましたとおり、今年はデジタル化促進ということで、ＤＸと一緒に補助枠を拡大し、企業のデジタル化を推進していこうということで取り組んでいるところです。

また、小・中学生を対象としたイベントについてですが、理科離れといいますか、若い子どもたちに理科が好きな子が少なくなってきたということがあります。しかし、今、世界的には理系の時代というか、そういう先端技術を持つ技術者がたくさんいることが国の発展にもつながるということで、小学生のときからそういった技術的なものに触れていってもらおうということがあり、財団でもそういう事業をやっております。ただ、確かに人数的にいま一歩ではあります。

今年は、札幌市政１００周年ということもあって、マインクラフトという人気のあるソフトを使って、今まさに小・中学生向けの事業をやっています。来週の月曜日にそのイベントのオープニングをやるのですけれども、２０名という少ない枠です。しかし、申込みが８００名あったと伺いまして、これはもう少し考えなければならないなと思っていたところですし、その後、さらに５回、子どもたちを集めてマインクラフトを使った取組をするということを考えております。

回答になっていないかもしれませんが、参考までに我々の今年の取組をお話しさせていただきました。

○平本会長　白崎委員、何か追加でご発言はございますか。

○白崎構成員　できれば詳しいところをもう少し教えていただければということでした。

また、こういうものに関してはさらに発展させていただければということです。

北大の学生が卒業しましても、かなりの数の人が本州に行ってしまうという話を聞いていますが、やはり、北海道をもっと盛り上げるために、札幌に、もしくは道内に残っていい仕事をしていただきたいなと思っています。なお、北大にいらっしゃる学生の半分以上が道外出身ということもあるでしょうけれども、北大に限らず、大学生をできるだけ地元に残すというのが大事なのではないかと思います。北海道では人口が減っていっていますけれども、それで抑制することもできるでしょうし、北海道独自で盛り上がっていくという意味でもそういう力が大事なのではないかと思っておりますので、お願いします。

○平本会長　おっしゃるとおりで、北大の学生のかなり多くは就職するときに道外に行ってしまうのです。

それもあり、今、北大では地域にどんな企業があるのかを若い人たちに見てもらうというような授業を始めているところです。それがどのぐらい効果があるか、今年に始めたばかりなので、分からないのですけれども、北海道には就職先がないという先入観を持っている北大生が多いのです。

ところが、地元に目を向けると、それほど有名ではないけれども、ものすごく社員を大事にしている企業が、それから、ある分野では、ニッチトップの企業もたくさんあるので、それを学生に分かってもらう取組もしていかなくてはいけないなと考えました。

それから、サッポロバレーというのでしょうか、札幌駅北口のＢｉｚＣａｆｅ等を中心としたＩＴ産業の集積みたいなものについては２０年前ぐらいに盛り上がったのですけれども、最近は聞かなくなりましたね。ここに同じ支援が必要かどうかは別ですけれども、先ほど木村委員からもお話があったように、デジタル化推進やＤＸという文脈で少しやりようがあるのかなとは思いました。

ほかにいかがでしょうか。

○草野構成員　私は大学生を中心に関わることが多いですけれども、１０代後半から２０代ぐらいのときに北海道なり札幌の地域に関わった子は、就職のときに出ていこうか、残ろうかに迷いますね。３年生ぐらいのときに聞いてもまだ決めていないのだ、どちらも考えていますと言うのです。それに、本州のどこかに就職していった子にも実は戻ってきたいという気持ちがどこかにあるのです。でも、それが途切れてしまうタイミングがどこかにあると思うのです。

また、ＩＣＴの話ですと、カムバックサーモンかもしれませんけれども、大きなところへ出ていき、成長してから戻ってくるというのも重要な人材の育成の方法かなと考えるわけですが、戻ってくるタイミングで接点がないという状態があるのです。３年から５年、もしくは、もう少したってから戻ってきたいなと思ったとき、北海道なり札幌なりとのつながりがなくなってしまっているということです。東京などに行った子たちと細かく関わりを持っていますと、そうした相談が来ます。数年後に戻りたいのですけれども、何かいい仕事はありますかという話はかなり入ってきます。ですから、ずっと向こうにいるとい

う感覚ではないということは情報提供したいと思います。
○平本会長　サケと同じで、３年から４年ぐらいで帰ってくるとすると、それぐらいのタイミングで接点をつくるようなことが重要だということですね。そして、その戻り先としては、札幌市だけではなく、連携中枢都市圏内に複数の働き場所がありそうだという情報提供が必要になるかもしれないというご指摘ですね。
　ほかにいかがでしょうか。小さなことでも構いませんので、お気づきの点のご発言をいただくのがこの懇談会の趣旨かなと思いますので、遠慮なくざっくばらんにお願いします。
○木原構成員　資料４の右側を見ますと青く色づけをされていますが、やはり、コロナの影響が相当大きいのだろうなと分かりますし、２年前から観光業界も相当の影響を受けているというのは皆さんもご存じのとおりかと思います。
　２年前、コロナに感染しましたといったときは、防護服を着て、スプレーをしてという状況でしたが、今はかなり緩い状況になっています。このゴールデンウイークも行動制限がかけられなかったわけですが、これは観光にとって非常に大きなメリットの要素があったなと考えております。
　札幌市内でも、ライラックまつりをはじめとして、ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭りやつい先日の札幌まつりもそうですが、皆さんは我慢していたのだなと感じました。それで中島公園に一気に押し寄せ、１３万人という結果になったのだろうと思っております。
　私どもも地域の魅力を生かした観光地づくりを行っており、あるいは、千歳市など、他都市直行便が就航しているエリアと他都市連携相互送客事業も展開しておりますので、それらで北海道に多くのお客様に来ていただく取組を進めていきたいと考えております。
　また、この１７日から国際線が新千歳空港で再開します。これは非常に明るい話にもつながってくるかなと思っておりますので、盛り上げていきたいと考えております。さらに、先般、６月４日、５日でしたか、アカプラと道庁の前庭でアウトドアデイジャパン札幌２０２２を２年ぶりに展開しましたけれども、２万５，０００人近くの来場者数がおりました。それから、ついせんだっては、大通公園で、お酒と食のおいしいマルシェを道新が展開され、５万人が入ったということでした。
　コロナだから動いてはいけないのではなく、しっかりと制限をすることによってイベントも実施できるのだよというようなモデルケースではなかったかなと思いますので、私どもとしては、今後とも、しっかりと観光を盛り上げ、連携中枢都市圏の地域の皆さんとも取り組んでいきたいと思っています。
　特に、千歳エリアは北海道・北東北の縄文遺跡群にキウス周堤墓群が登録されていますから、ウポポイとセットに、マイクロツーリズムに取り組みたいと考えております。しかし、ガイドの育成をしていかなければいけないわけで、それをどうしていくかということがありまして、そこでは千歳の皆さんにも動いてもらうことも必要ではないかなと思っております。
　ここで質問です。

鳥獣対策に触れられておりましたよね。Ａ３判の資料の裏面の右側に鳥獣対策等に関する取組の推進ということでヒグマについて触れられておりますけれども、ニュースを見ると、札幌市内の全ての区で熊や鹿が出たということがありますよね。この対策について、分かる範囲で結構ですけれども、措置をしないのか、そのままにしておくのかを教えていただきたいと思います。

○平本会長　観光という立場からのご発言でした。この２年で、コロナへの対策が我々も随分と分かってきて、人が少し戻り始めているということでした。あるいは、連携中枢都市圏という観点からいくと、札幌以外の連携中枢都市圏を構成する自治体にもいろいろな観光資源がまだあり、連携中枢都市圏の構想の中で連携中枢都市圏内の観光というようなことも考えられるというようなご指摘でした。

今、後半でご質問のあった熊ないしは鹿に関することについてお答えいただけることはございますか。

○事務局（伊藤広域連携担当課長）　札幌市としてヒグマにどう対応するのかについてですが、私からこうこうこういう対応ですとご説明する知識がないので、原局に確認し、情報共有をさせていただければと思います。

ちなみに、鳥獣対策等に関する取組の推進におきましては、各連携市町村の担当の人たちを集めて研修会を行うほか、ヒグマの出没状況の共有化に向けた検討をしていきましょうという内容になっております。

○平本会長　読んだものによると、ヒグマは１日の行動範囲が数１００平方キロメートルぐらいあるというのです。そうすると、連携中枢都市圏の中を自由に動き回れることになりますので、まさに市町村間の連携がとても重要になるかと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○伊藤構成員　資料４の２６のにぎわいの創出でいきますと、達成不可ということでバツがついています。しかし、新型コロナの感染拡大という中では仕方がないということですよね。また、最近は若干増えてきておりますけれども、感染状況を見つつ、しっかりと対策をしながら、イベントを再開させ、あるいは、これから進めていくに当たってのＰＲの強化をしていただきたいと思います。

特に、札幌都市圏でいいますと、新篠津村や長沼町などのような純農村地帯もあれば、札幌のような都市もあるわけです。そういったことから都市と農村の共生や対流がお互いを理解していく上で非常に大切になると思います。そのとき、イベントを通じて、私どもＪＡグループであれば、農産物や加工品など、特色ある農産品や物産を都市圏内の方に理解してもらい、地元のものは地元で活用、消費していくといった思いを皆さんで共有できればいいなと思っておりますので、コロナ対策に留意しながらさらに進めていただきたいと思います。

なお、会長からＫＰＩの話がありましたが、にぎわいの創出でいうと、イベントの参加人数が指標となっております。例えば、ＫＰＩにＰＲのホームページ運営とあるのですが、

ホームページのアクセス数がどれぐらいあるか、いかに魅力あるＰＲがされているかを加味することもあるのではないでしょうか。

私どもは農作物のＰＲをさせていただく上でホームページへ掲載するほか、ＣＭも打つのですね。どうやってその効果を測定するのかは私どもも課題だと思っているのですが、数だけではなく、いかにお金を落とすかはもちろん、ＰＲであれば、先ほど申し上げましたとおり、アクセス数を評価するなど、可能な範囲でご検討していただけるとありがたいと思います。

それから、学生をいかに地元にとどめるかについてです。

私どもは農業団体ですが、農業系の高校や大学、例えば酪農学園大学がありますが、そこの学生に地元に人材として長く残っていただくということは大事だと思っていまして、私どもＪＡ北海道中央会と酪農学園大学で連携協定を結ばせていただいています。今はコロナで頓挫しているのですが、例えば、学生に農業現場に来てもらい、実習していただく中で農業に少しでも興味を持っていただく、あるいは、就農するということだけではなく、農業をサポートするような組織もあって、そういうところに興味を持っていただくような取組も進めようと思っておりまして、このように様々なことを行って地域に残っていただけるようにと思っております。

特に、農業系の大学には府県から来ている学生も結構多いので、北海道の地元の方が残るということはもちろん、府県から来た学生に北海道に残っていただくということも大事かなと思っております。いろいろなご協力をいただきながら、私どもとしてもやれるところは取り進めていきたいなと思っていますので、よろしくお願いします。

○平本会長　連携中枢都市圏の文脈でいくと、都市部と農村部というのでしょうか、そういう二つのエリアを含んだものになっていますので、そういった強みを生かすという意味合いをビジョンにうまく反映させていき、それがうまくいけば若者をとどめることにもつながるのではないかというご指摘ではなかったかと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○白崎構成員　関連してお話しします。

今、東南アジアからの技能実習生がなかなか来られない状況になっております。私の知り合いのところもそうですが、人手が足りない、高齢化しているということなのですが、学生のアルバイトを含め、体験してもらうことが非常に重要なことではないかなと思っています。

それに関連しまして、２９の子どもの社会体験活動等の場の創出に関する取組の推進についてです。

最近、中学生や小学生にはユーチューバーになりたいという子がすごくたくさんいるみたいですが、それは現実の社会を見ていないからなのではないかと思っております。ユーチューバーはすごくいい仕事なのかもしれませんが、私の理解の範囲では仕事としてはあり得ないことだろうなと思っています。

話は戻りますが、やはり体験するということが非常に大事です。中学校や高校で、将来、どうしたいかを考えることになるわけですが、それは紙の上だけだとなかなか難しいわけで、実体験できる機会をぜひ増やしていただきたいなと思います。

北海道医師会では、道内各地で医師、看護師の実体験を高校生にしてもらうという事業を進めてまいりまして、それなりに効果が上がっていると私は思っております。仕事とはどういうものなのかを子どもたちに体験して分かっていただけるよう、そうしたことを進めていただきたいと思います。

○平本会長　実体験の場という意味でも連携中枢都市圏がいろいろな自治体から構成されていることがある意味ではプラスに働くのかなと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○中原構成員　資料４の３ページの２３「公立夜間中学の共同活用に向けた取組の推進」についてです。

昨年秋に、非常によい取組であり、意義深いというコメントを差し上げたところです。義務教育未修了者は意外と道内に多いのです。その点から、入学対象者を札幌に限定せず、連携市町村の方々にも広げたところがよいと思いました。

何となく、北海道の中で札幌だけが、人口、産業、情報、教育、文化、全てが一極集中し、ポテンシャルが非常に高いところになってしまい、ひとり勝ちの感があります。連携中枢都市圏ビジョンの中では、それぞれの市町村が役割分担をするとなっているのですが、圏域として持っている大きなポテンシャルを圏域内で相互に波及していくような仕組みがどんどん推進されていけばよいと思います。

２３は昨年度から導入された新しい仕組みなのですけれども、今年度は新たに、図書館の図書を圏域の中で相互に貸借するような仕組みも導入されました。ハードの面もすごく大事ですが、ハードな面に加えて、なおかつ、生活、文化、教育というソフトの面も大いに推進していただければと思います。今後の成果に期待しております。

○平本会長　夜間中学校の生徒を札幌市民だけに限定せず、広域連携中枢都市圏内の方々にも開かれていること、こういう枠組みができたからこそ、そういうことができたということですね。さらに、図書館の図書の相互利用などもこの枠組みの中でできるし、それは有意義なことだということでした。

おっしゃるとおりでして、せっかくこういう枠組みでやっているのだから、もうちょっとやり取りすればいいのでしょう。ただ、聞くところによると、札幌市の財政担当の方は、札幌市民が払った税金でどうして周辺市町村にサービスを提供しなければいけないのだと言うということも小耳に挟んだことがあります。そのロジックも分かるのですよね。突き詰めて言うと、総務省のもともとのフレームワークがあまりよろしくないからではないかと思うのですけれども、今与えられている枠組みにおいて、連携中枢都市圏の中でうまくリソースを共有しながら価値を高めることができるものは積極的にやっていくということが必要なのだろうと思います。

中原委員が今ご指摘くださったことは、そういう点ではうまく回りつつあるということでご評価をいただいたということだと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○稲上構成員　私は７月１日で北海道銀行地域創生部に転勤してきたわけですが、それまで月形町におりました。月形町は、今、人口が３，０００人を切って、非常に危機的な状態と言ったら怒られますけれども、いかに人口の減少を緩やかにしていくかに一生懸命取り組んでいるところです。それを踏まえ、いろいろな地域の動きを見てみますと、道南の厚沢部町では保育園留学を絡めた移住・定住体験を今盛んにやっています。そうしたところ、２００組ぐらいの申込みがあって、移住・定住用に用意した住宅が予約で埋まっている状況です。

今まで、移住をすることに対する思いというのは、どちらかというと、引退してリタイアした後、ついの住みかを求めるという意味で移住することが多かったのですけれども、そこには子どもの学校の問題があります。

地方は認定こども園にも空きがありまして、保育園をつけることによって、都市部に住んでいる若い家族が子どもに自然を体験させたいということで非常に引き合いがついています。

先ほどからコロナのいろいろな話が出ていますけれども、コロナで一番変わったことはテレワークだと思うのです。今までは移住すると転職しなければいけなかったわけですが、移住イコール転職ではなくなった、これが一番大きいのではないかなと思います。この話にヒントを得て、次に何ができるかと考えたわけです。

月形町には工業団地がないですから企業誘致もなかなか進みません。それに、南幌町や長沼町から見ると新千歳空港からも遠いので、東京からの企業を呼ぶこともできないのです。また、当別町、新篠津村というのは石狩郡なのです。しかし、月形町は樺戸郡なのです。聞こえが非常に悪いのです。石狩郡というと札幌に近いのだなとイメージが湧きますが、樺戸群というとどこにあるのだろうという感じです。

話がまとまっていませんが、移住イコール転職ではないというのがこれからのキーワードになってくるのではないかなと考えています。札幌は人が比較的集まりやすい場所ですけれども、それでも減少しているという状況ですので、そうしたことを私の体験の中でお話しさせていただきました。

○平本会長　おっしゃるとおりです。ＮＴＴではテレワークが原則で、本社に出るのは出張扱い、飛行機もご自由にお使いくださいという感じです。あの記事を新聞で見て、目がぱっと覚めましたけれども、そのようなことを大手企業がやるような時代なので、移住促進という考え方、あるいは、Ｕ・Ｉターンについても、従来の延長線上の発想とは違う方向から考える余地があるのではないかというご趣旨かなと思います。

あるいは、兵庫県明石市でしたか、１０年以上ずっと人口が増え続けています。市長が非常にユニークな方で、注目されていますけれども、子育て支援を徹底的にやればどんど

ん人が入ってくるのだということです。

それも含め、札幌市のみならず、連携中枢都市圏の中で何かできることがあるのかもしれないということはご指摘の中に含まれているかと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○伊藤構成員　今ほど意見がありましたし、厚沢部町のすばらしい例もご紹介いただいたのですけれども、この都市圏には純農村地帯もありますし、それ以外にも環境が非常にすばらしいところがたくさんありますが、コロナの中、テレワークということで地域に住みながら仕事ができるといった環境も整ってきていますし、都市のごみごみしたところから環境のいいところに住んでみたいといったことで、今までとは意識も変わってきているのかなと思っています。

ですから、コロナというピンチではありますけれども、逆にチャンスとして捉え、札幌都市近郊でも非常にすばらしい田園や農村風景のところに都市から人を呼びこむような取組について、ぜひ前向きに捉えて考えていただければありがたいなと思います。

○平本会長　まさに、連携中枢都市圏で考えると、札幌の近郊に様々な魅力のポテンシャルがあるというご指摘で、おっしゃるとおりだと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○李副会長　本来であれば対面で参加すべきところ、授業が決まってしまい、オンラインで参加することになったことをお許しいただければと思います。

皆さんの意見を伺っていまして、そのとおりだなと思って聞いていました。

ただ、１点だけ、違うかもしれないのですが、札幌の連携中枢都市圏ビジョンを考える際、周辺の市町村が置かれている立場、あるいは、ニーズをいかにうまく吸い上げるかという観点もすごく大事かなと思いました。今まで十分にご議論され、この案が出されてきているとは思うのですが、最後の今年度のタイムスケジュールを見ても、新たに吸い上げる場面がなかなか見受けられないなと感じました。

例えば、規模は小さいのですけれども、小樽市と北後志の６市町村による同じようなビジョン懇談会を担当しているのですが、積丹町や古平町など、離れている地域の声をいかに拾い上げることができるかは出されております。それに、先ほど意見があったとおり、特に若者にその地域でこれからも住み続けたいと思わせるために何が必要なのかについて、できるだけ生の意見を拾い上げたいなと思い、グループセッションみたいなものを行ったことがあります。

首長の意見を聞き入れることも必要かもしれないのですが、地域住民の声、特に若者の声をもう少し拾い上げるような仕組みをぜひ考えてほしいなという意見です。

○平本会長　今の李副会長のご指摘はとても重要だと思います。李副会長が小樽商大の先生でいらっしゃることを除くと、札幌市に拠点のある方ばかりなのです。それも含め、李副会長がおっしゃったとおり、札幌以外の市町村のニーズをきちんと吸い上げた上でビジョンに反映させることができているのだろうかという反省はこの懇談会としても常に持た

なければいけないのだろうと思っております。

懇談会の構成員を替えるのがいいのか、増やすのがいいのかについては考えなければいけないところですけれども、今の李副会長のご指摘は本当に重要でして、我々がここで札幌市の会議室に集まってああだこうだと言っても、周辺市町村の方々の心に響かないことを言っていたらまるで無意味なのです。

李副会長、どうしたらいいでしょうね。

○李副会長　いろいろなやり方があると思いますけれども、私が試したのは、例えば、年に一、二回、推薦された方ではなく、ボランティアで手を挙げてもらった若い世代の主役たちに集まってもらい、本当に忌憚のない意見交換会をするということですね。

そうすると、現場感覚といいますか、札幌で会議をやるだけではなかなか出てこないような課題や視点が出てくるのかなと思いますので、何らかの形でそういう意見を吸い上げる場がつくられるといいのかなと思います。

○平本会長　連携中枢都市圏を構成する若い人たちを対象に募ってワークショップをやるということがありそうだなと李副会長のお話を伺って思いました。

ほかにいかがでしょうか。

○福井構成員　李副会長のご発言はごもっともで、実は、商工会議所は札幌を中心に４２か所あるのですけれども、地方都市でして、我々職員が、年１回、必ず出向くようにしています。行けないところもありますし、コロナで行けないような場面もあったのですけれども、極力、職員が年１回は行って現地のお話を伺ってくるということです。会議の場面や書類だけでというのにはやはり限界があって、行ってみて、話を聞いて、人と会って、お店に行ってみたいなことが大事なのです。

平本会長がおっしゃるとおり、札幌にいると分からないことがたくさんありますね。多分、札幌が基準ではなく、札幌は異常なのです。その感覚は大事なのだなと思いますし、小樽市もそうですけれども、他都市へ行くといろいろと動きがあるのです。それは新聞だけでは分かりませんし、行ってみないと、肌感覚でというのもありますし、聞いてみてというのもあるので、すごく大事なご指摘かなと感じました。

○平本会長　私もおっしゃるとおりだと思います。出向く、実際に行ってみるということが本当に重要ですよね。このビジョン懇談会でもそういうようなことがどこかで織り込めるといいなと思います。これについては委員の皆様方からご意見をいただきつつ、事務局にもご検討をいただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○小高構成員　この懇談会に出席させていただくのは初めてなのかなと思います。環境省北海道事務所の小高と申します。ずっと東京で仕事をしていまして、昨年５月にこちらに赴任し、約１年たちました。

環境の分野では、今、脱炭素の取組がすごい高まりを見せていて、北海道の自治体でもいわゆる脱炭素宣言をしている市町村が、１７９市町村のうち、７５に至っています。

この連携中枢都市圏のまちはほとんどされているのですけれども、岩見沢市や江別市、北広島市、南幌町、長沼町はまだ脱炭素宣言をしておりません。ただ、総じて石狩管内は脱炭素の取組の高まりがすごいなと感じています。

今年の４月末に脱炭素先行地域を全国でこれから１００か所選んでいくぞという取組がありました。全国で２６か所が選ばれたのですけれども、そのうちの三つが北海道でして、都道府県別で言うと、何と全国で１番でした。石狩管内では石狩市が先行地域に選ばれております。

先ほどの資料４の３５に水素のサプライチェーンの話が出ていましたけれども、あれは、今後の石狩市の洋上風力、再エネの導入の増加に伴い、余剰分を水素に換え、大消費地である札幌で消費していこうという取組です。

このビジョンを見ますと、ゼロカーボン北海道を掲げている北海道があって、ゼロカーボンの視点が、これをつくったときはその機運がまだ高まっていないときだったからかなと思うのですけれども、次のフェーズのときにはゼロカーボン北海道で唱えられているような話がちりばめられるときっといいのだろうなと思っています。

ちりばめ方は、個別事業で変えていくのか、それぞれの自治体が取り組もうと思っていることの束ねなのかはありますが、次のフェーズではそうなっていくことを期待しておりますと。

また、先ほどの李副会長からの若者の意見の吸い上げについてです。

リリースが来週なので、正式にはお伝えできないのですけれども、私も同じ問題意識を持っておりました。いろいろなビジネスチャンスといいますか、地域課題がこれだけ至るところにちらばっています。そうした課題があれば、それはビジネスになるわけですが、そのきっかけが北海道にはたくさんあるということなのです。北海道と言えるほど北海道全体を回っているわけではないのですけれども、札幌圏域にもたくさんあります。でも、チャレンジできるよりどころです。イノベーションの誘発と先ほど資料には書いていたのですけれども、その仕掛け場が異様に少ないなというのが北海道に来てみての印象でした。

そういう場づくり、きっかけといいますか、アイデアを出し合って意見交換をする場ですよね。堅苦しい意見を言っていただく必要はなくて気軽な、若い人はもとより、主婦の方でもいいのですけれども、とにかく地域のこと言いやすい場づくりが必要だなと思いまして、そういうよりどころづくりの仕掛けを７月末に考えています。

それがリリースされ、もし事務局がよければ、意見の吸い上げみたいな取組を進めていく際にこちらで仕掛けようとしている場づくりのコンテンツも使っていただけたらありがたいなと思います。

○平本会長　今、小高委員から北海道に来てイノベーションを誘発する仕掛けがとても少ないと感じられたということだったのですけれども、今までご経験になったもので、こういう仕掛けは意外と機能しているなというのがもしあれば、簡単でいいので、一つか二つ例をお教えいただくことはできますか。

○小高構成員　東京を例に出すのはすごく嫌いで、例に出したくないのですけれども、東京で出すと、一番うまくいっているなと思うインキュベーション施設というのですか、事業を生み出す、ふ化させる場ですが、仕事帰りに立ち寄ったり、あるいは、ずっとそこで働いている人もいるのですけれども、全然出会ったことのない人たちが日常的にそこに通い詰めて、ふとしたきっかけでビジネスが始まるという場が渋谷にもあります。そこは本当に活気にあふれていて、ホームページを見てもちょっと立ち寄ってみようかという気にさせる場になっています。

北海道にも幾つかインキュベーション施設はあるのですけれども、出かけてみますと、やっぱり人が少ないな、寂しいなと感じます。インキュベーション施設に来ているのにほとんど会話をしていないな、これはちょっと寂しいなと思ったので、そういうにぎわいの創出をしていければいいのかなと思っています。

○平本会長　インキュベーションやコワーキングの場が重要だということですね。もう一つ、物理的な場が必要なのと同時に、例えば、インキュベーションマネジャーやコミュニティーマネジャーのように、人と人とをつなぐ役割の立場の人がいることも重要ですよね。そうなりますと、その育成もきっと課題になるでしょうね。

また、そういった場づくりに関する取組について正式にリリースされるということでしたが、事務局と共有していただきながら、李副会長のおっしゃった意見の吸い上げに反映していただくよう、お願いいたします。

ほかにいかがでしょうか。

○草野構成員　関連しての話です。

４６の気候変動・ＳＤＧｓアクションＬａｂｏについてです。

去年、アドバイザーで関わったのですが、私はユース世代と社会課題のコーディネートやアドバイザーとして呼ばれ、そこで関わる機会が多いです。そこでは、考える場づくりの後に、次にアクションしましょうということで、地域や最前線の現場に行くということになるのですが、例えば、国立公園でオーバーツーリズム的な、旭岳であれば山が砕けていて、参道を直すところに全国からボランティアが集まってきたもののお手伝いをしたりしていますし、今日も石狩市浜益区の果樹園のところに何人か行っています。

ちなみに、私は石狩市に住んでいます。札幌生まれ札幌育ちですけれども、フェスが石狩市であったから石狩市に引っ越したのですね。ですから、石狩市のニーズは押さえているつもりです。

人が少ないという課題があるところに若者を送って、そこで何かの活動をして戻ってくるとき、情報と一緒に戻ってくるのです。つまり、あちこちでこういう課題が起きていますということを資料、何をしてきたのと聞くと、ここでこういうことを取り組んできた、何でなのと言ったら、こういうことが起きていてと知っているわけです。

例えば、果樹園の担い手不足も、ある日、突然、担い手がいなくなるのではなく、去年、この時期にさくらんぼを手伝いに来ていた方の１人が、高齢化、あるいは、足をけがして

来られなくなってしまったからで、今年は３人が来られなくなったのです。こうなると死活問題です。このように徐々に徐々に衰退していくのですね。それを何で私たちが分かるかというと、何回も何回も足を運んでいるので、今年は３人少ないのですよね、何とかならないかなという話を聞けるからです。

このように、マニアックというか、入り込まないと分からない情報を、私は札幌で話を聞いているだけなのですけれども、知っている情報をこういった場でお伝えできると地域側のニーズや課題感をお伝えできるのかなと思いました。

○平本会長　今の草野委員のご発言、あるいは、李副会長や小高委員がおっしゃった意見の吸い上げや状況の把握と関わることでして、そういった仕組みがこのビジョン懇談会にうまくビルトインできるといいなと思いながらお話を伺いました。

時間が迫ってきましたが、ご発言がございましたら、ご遠慮なくいただきたいと思いますけれども、いかがでございましょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○平本会長　それでは、これ以上ご発言がないということでしたら、ディスカッションは閉じさせていただきます。

ここで遅れて到着されました浅村部長よりご発言をお願いいたします。

○浅村政策企画部長　政策企画部長の浅村です。今日は、遅参してしまい、大変申し訳ございませんでした。１時間半という長時間にわたりまして、忌憚のないご意見をいただきまして、大変ありがとうございます。

また、今回、委員の改選期でしたが、構成員を快く引き受けていただいたことに心から感謝申し上げます。

この懇談会は、対面での開催が２年ぶりであり、２年間ほど、コロナの関係で書面開催とさせていただいておりました。私は、今日、途中から参加しましたけれども、書面開催とは違い、皆さんからいろいろなアイデアをいただけましたし、非常に活発な議論をいただけたなと思っております。

さっぽろ連携中枢都市圏ビジョンは平成３１年に策定しておりますけれども、計画期間が２０２４年３月までということで、あと１年半となります。今日の意見も含め、皆さんの様々な意見は、次のビジョンにどう生かしていくかという観点で整理し、検討させていきたいと思います。

今日のご意見も事務局でしっかりと受け止め、整理をさせていただくとともに、次の懇談会におきましても、そういった視点も含めてご議論をしていただければと感じております。

今日は、本当に長時間にわたり、ありがとうございました。

５．閉　　会

○平本会長　どうもありがとうございました。

本日は、委員の皆様方からたくさんの役に立ちそうなアイデアをいただきましたが、事務局でまとめていただき、次の懇談会につなげていただければと思います。

また、オンラインでご参加をいただきました李副会長、庄田構成員、お２人ともどうもありがとうございました。

それでは、これで本日の懇談会を閉じます。

どうもありがとうございました。

以　　上